

赤水の功績 ビデオに

顕彰会と日本地図学会 教育などで活用へ

日本で初めて経緯線を入れた日本地図(赤水図)を完成させた高萩市出身の地理学者・長久保赤水(1717-1801年)。その関係資料が国の重要文化財に指定されたのを受け、日本地図学会と「長久保赤水顕彰会」(佐川春久会長)は、資料を所蔵する高萩市歴史民俗資料館で、赤水の功績などを紹介するビデオ撮影を行った。24日から約1か月間、オンライン開催される博覧会「G空間エキスポ2020」で公開し、今後の地理教育でも活用していく。

(日大経済学部教授)と太田弘企画委員会委員長、歴史地理学会会長の小野寺淳・茨城大教育学部教授が参加。赤水図の特徴や意義、地図作製の経緯のほか、学校教育での赤水図の活用方法などについて解説した。

G空間エキスポは、電子地図や全地球測位システム(GPS)による位置情報などを活用した技術やサービスが一堂に集まるイベント。今年は新型コロナウイルスの影響でオンライン開催となる。

赤水は、伊能忠敬の日本地図(伊能図)ができる42年前の1779年に「改正

赤水図を見ながらビデオ撮影の打ち合わせをする
 顕彰会委員長(中央)ら(9日、高萩市で)



日本輿地路程全図」を完成させた。地名などの地理情報が豊富に書き込まれた赤水図は出版・販売され、江戸後期に広く普及した。赤水の子孫宅に伝わる地図や絵図など693点が9月30日付で正式に重文に指定された。

顕彰会委員長は「重要文化財という国の宝になった以上、積極的に向き合うべきだ。現代の地図帳と比較しながら赤水図に書かれた様子をじっくり見て感じ取ってほしい」と話した。

高萩市歴史民俗資料館では、重文指定を記念した特別展が15日まで開催されている。